

道元禪師と瑩山禪師

角 田 春 雄

日本曹洞宗史において、越前永平寺の開山道元（一二〇〇—一二五三）と、能登總持寺開山瑩山（一二六八—一三二五）とは、現在曹洞宗において、高祖、太祖と仰がれて釋尊を中心の一佛兩祖の脇佛として、同宗信仰の本尊とされている。それ程兩者は日本曹洞宗にとつて重大な存在である。今兩者を比較してみると、一、生出地の相違。道元は、京都の公家久我内大臣通親を父とし、三井寺・延曆寺・建仁寺、即ち京都文化の圏内で青少年時代の教育を受けた。瑩山は、越前の豪族瓜生氏の家に生まれ、永平寺、實慶寺、大乘寺等主として北陸の地で青少年時代に禪籍を母胎とした教育を受けた。即ち道元は、舊佛教である天台宗の教學から出發し、瑩山は最初から曹洞禪である永平寺義介に就いて出家したのであつた。二、宋と元。道元は、一二三三年二月二日に京都を發して明全と共に入宋し、天童山、阿育王山、杭州の徑山・平田の萬年寺、大梅山護聖寺に學び、一二三七年に天童山如淨から嗣書を相承し、芙蓉道楷の法衣、寶鏡三昧、五位顯訣、頂相を受け「佛果碧巖破擊節」を書寫して版朝したが、特に天童山の如淨の特異な人格と教育とに傾倒した。これに對して瑩山は、永平寺の義介、懷辨、實慶寺の寂圓、比叡山、紀州由良興國寺、心地覺心、高野山金剛三昧院、退耕行勇入元者である寒嚴義尹等につき同じく入元者である大智の請來した禪籍に目を通してゐる。即ち

道元は宋の影響を強く受け、瑩山は元の影響を受けてゐる。三、著作。道元は、正法眼藏、永平廣錄、普勸坐禪儀、典座教訓、學道用心集、傘松道詠集、實慶記、正法眼藏隨聞記等の數多くの著作があり、主となるものは自から筆をとつたものが多い。瑩山の場合は著書がその宗教活動の主とはなつてゐない。著作物も道元より少く、その主たるものは、一二三〇年正月十二日開演した傳光錄をはじめとして、彼の永光寺における日記である洞谷記、瑩山清視、坐禪用心記等と書簡等である。しかも彼の生存中に一卷の書物として成立したものは少く彼の滅後に完成したものが多くと見るべきであらうが、例外として徹通裏記の如きは小部であるが彼の在世中に完成したものである。内容は、道元が頗る哲學的であるのに對して、瑩山は、歴史的傳記的な面が目立つてゐる。四、外護者と住山。道元の外護者は、山城觀音導利興聖寶林寺は藤原教家并に正覺尼であり、鎌倉建長寺では北條時頼であり、越前永平寺では波田野義重及び左金吾禪門覺念であつた。その住山地は、京都の妙法蓮華經庵、寶林寺、鎌倉の建長寺の短い期間を除いては、越前の大佛寺乃至永平寺が大部分であり、教化の主力は永平寺に於いてであつた。瑩山の外護者は、能登地頭長谷部政連及び守護職畠山家。能登賀島郡中河地頭酒匂頼親、頼基の父子。（永光寺方丈の寄進）、能登賀島郡酒井保の山地を寄進した滋野信直（妙淨）同妻（祖忍）。能登諸獄寺觀音堂の寺領敷地等を寄進した權律師定賢等であつた。その住山地は、明峯素哲の嗣である大智が、瑩山のことを「兩處住山三十年」と誌しているが、その兩處とは加賀の大乘寺と能登の永光寺であつた。その經營した寺院は、永光寺、大乘寺、圓通院、實應寺、光孝寺、放生寺、淨住寺、大乘寺、總持寺であり、教線を張つた主な場所も加賀、能登の二國が主力であつた。地

五、行と行法、小川靈道氏發見の天正本「永平高祖行狀建擧記」には、今迄の曹洞宗學研究者の誤りを正す重要な箇所がふくまれている。即ち、「開山御現在之内、永平寺行法ヲコナイ始メ給事ワ、皆懷井ヲ以テ行セ給也。有時二代開山和尚ニ此不審アリ、開山云當山ハ佛法ノ勝地也、令_ニ法久住_ニ吾成_レ望也。吾レハ公ヨリ少_シシトイ_ニエトモ必ス可_シ短命、公ハ又吾レヨリ老タリトイ_ニエトモ必ス可_シ長命、吾佛法至_レ公未來際ニ廣ク可_レ傳、カルカ故ニ令_レ出_ニ勤行_ニト云々。」即ち永平寺行法は、道元は實際には行はなかつたのである。道元が正法眼藏をはじめ數多くの著書の中で行を説いているが、道元の強調して實踐した行とは、坐禪の一行であり、他はそれに關連した行であつたと見直さなければならぬ。即ち現代迄の宗學者の多くが道元が行法を實踐しなかつたことを明示していないのは、道元を解明する上の大きな誤りであらう。瑩山の場合は、勿論坐禪を行じているのであるが行法を行じ、それを瑩山清観として明文化した點に彼の大きな功業がある。小川氏本建擧記の開山御現在之内、永平寺行法ヲコナイ始メ給事ワ、皆懷井ヲ以テ行セ給也。」とある懷井の高足義介が師であつて、義介が懷井の使者として天童山から、御影、天童山の圖と共に、視矩、法度、四節之禮を弘長二年に持ち歸つたのであるから、懷井——義介——瑩山——明峰を主軸とした大日能忍の日本達磨宗からの歸投者の手によつて、日本曹洞宗の清規と實踐は完成されたのであつた。瑩山清規に彼の名が冠せられているのは、行法において彼が最大の功勞者であつたことを意味している。六、兩者の特色。道元の宗風は、敎理的、哲學的、ビュリタント的であつた。建長元年十月八日附の禁制は最も永平道元の性格を知るのに適しているからこれを記してみると、「如三千釋因緣、不_レ在制限、一、當寺住

應_テ止諸侶方御持僧參勤_ニ事。一、當寺住侶應_テ止_ニ經道_ニ參_ニ陳_ニ訴訟_ニ事。一、當寺應_テ停_ニ止_ニ補_ニ成_ニ功僧綱、補_ニ諸寺之有職_ニ事。一、當寺住侶不_レ可_レ受_ニ諸家之例時僧請_ニ事。一、當寺住侶不_レ可_レ補_ニ自他寺院勸進職_ニ事。一、當寺住侶跪_ニ地頭守護所政所_ニ致_ニ訴訟_ニ應_テ停止_ニ事。一、當寺住侶不_レ可_レ受_ニ驗者請_ニ事。一、當寺住侶不_レ可_レ交_ニ列他所僧徒_ニ受_ニ利事。一、當寺住侶不_レ可_レ補_ニ諸方墓堂供僧三昧_ニ事。以前條條爲_ニ佛法興隆_ニ、欲_レ下_ニ御下知_ニ之狀如_レ件。建長元年十月十八日永平寺上。（建擧記）注目すべきことは、永平寺が要望しているのであつて、徳川幕府が寺院を取締つての禁制とは、全く根本趣意が逆であり、道元の場合は、佛法だけでなく、寺院迄が佛敎側が主であつたことに注目しなければならない。瑩山の特色は、清規の確立。法嗣の養成。數多くの置文による寺院の保護。檀那の尊重等に特色があり、敎理は道元のそれを繼承し、弟子峨山において石霜系の五位を附加した點に功績があつた。瑩山の最大の特色は檀信歸崇であるがそれを證明するものは、佛言く、篤信の檀越は之を得る時、佛法は斷絶せずと。又云く、檀那を敬うこと佛の如くすべし。戒定慧解、皆な檀那の力に依つて成就す。然る間、瑩山今生の佛法修行は、この檀越の信心に依つて成就す。故に盡未來際、この本願主の子々孫々を以て當山の檀越大恩所となすべし。是故に師檀和合して親しく水魚の昵_しみをなす。來際一如にして骨肉の思を致すべし。用心かくの如くならば、實に是れ當山の師檀となすべし。たとい難値難遇の事あるも、必ず和合和睦の思を生ずべし。（洞谷山置文）であつて彼は日本曹洞宗において、眞宗の蓮如の役割を果し得た人であつた。

（參考書）道元禪師全集。常濟大師全集。總持寺誌。小川本建擧記。曹洞宗全書。